

# マクシーン・シーツ『舞踊の現象学』におけるサルトルの対自存在理論の役割

石 渕 聡

## (研究主題)

マクシーン・シーツ<sup>1)</sup>は舞踊を一つの現れとみなすことにより、現象学的な分析を試みている。その基本的な考え方は、S. K.ランガーの舞踊論を前提としたものであり、さらに、それにサルトルの存在論、M.ポンティの身体論を加えている。本稿は『舞踊の現象学』の理論的枠組みを検討する中で、サルトルの対自存在の理論がどのように移入されているかを考察する。

## (考察)

まずシーツの出発点であるが、用語的にもランガーのものと同じのものが多く彼女の芸術論<sup>2)</sup>に基礎を置いていることは明らかである。ランガーは芸術を多岐に渡って分析するが、その基本的な理論モデルは一貫している。彼女の分析は「あらゆる種類の芸術もその根底にあるものは等しい」という仮説に基づいて行われる。芸術作品は常に単一のシンボルを有しており、そのことは複数のシンボルがある構文によって連なっている論弁的なシンボル体系である言語と決定的に違う。芸術をこのような翻訳できない形式のシンボル体系＝「現示的形式」として捉えること、そしてそれは常に言語的言語との差異によって抽出され得るとするのがランガー理論の方法である。ランガー芸術論の特色は芸術を虚性として考えるところにある。ランガーは芸術の本質を幻影に求め、舞踊を成立させる根本的な幻影として虚の力をあげている。シーツはランガーのこのような概念から、それらの幻影がどのようにして現れるのか、またその構造はいかなるものか、また、我々はどうのような方法によってこれを捉え得るか、という問題を主眼とする。したがって、『舞踊の現象学』はランガーの舞踊論を発展継承しつつそれを現象学的新たな枠組から再考したものといえる。

サルトルは『存在と無』において人間存在の基本的あり方である対自存在の構造を明らかにしている。それは時間論を内包しており、シーツにとって、舞踊分析における時間論の枠組を提供することになる<sup>3)</sup>。つまり、時間は人間の存在様態からつくりだされ、それは瞬間にとどまることのない脱自的な様相を備えている。人間の存在のあり方は常に「あるところのものであらぬ」というものであり、未来に自己を投企している。この理論からシーツは「つくりつつある形式」Form in the makingというダンスの形式論を展開する。そ

れは前述の脱自的な性質を備えており、過去、現在、未来にサルトルが時間を分割しなかったように、舞踊に対して一にして多、多にして一という統一的分散性としての性格を与えている。このようなサルトルの理論の援用を実際にするものとして「生きられる体験」lived experienceが扱われる。それは反省的行為以前のものであり、我々はそれによってのみ、「つくりつつある形式」のうちに立ち現れるところの舞踊の幻影である「虚の力」を観取し得る。したがって、「幻影」「虚の力」「つくりつつある形式」「生きられる体験」はすべて人間の脱自的なあり方、および舞踊の脱自的なあり方を基盤として連なる概念である。そのことによって、諸々の用語概念が相互に関係し、理論的に一貫したものとなっている。それらの用語からなる理論の流れを端的に記すと次のようになる。「芸術の本質はその芸術に固有の幻影である。舞踊の幻影は虚の力であり、それはダイナミックラインとして現れる。それらを統一するものはつくりつつある形式であり、一度これが破壊されると舞踊は単に物理的な動きでしかなくなってしまふ。我々はダンスについてこのつくりつつある形式を暗に知っているのであるが、それは前一反省的な生きられる体験のもとでのみ知り得ることである。」

## (結論)

以上、『舞踊の現象学』で扱われている諸概念を記してきた。それはランガーの舞踊論をサルトルの理論に基づいて再編成したものであると考えられる。すでに述べたように、シーツは「幻影」「虚の力」「ダイナミックライン」等の諸概念をランガーに負っている一方で、「つくりつつある形式」という独自の概念を提示している。両者の理論の最も大きな差異は、ランガーが時間と空間を舞踊にとって二次的なものであるとした点である。シーツは「つくりつつある形式」によって、舞踊を時間的連続性、空間的統一性たらしめるものとし、それを舞踊にとって不可欠のものとしている。それはまさにサルトルの対自存在のあり方にモデルを置いたものであって、舞踊がどのような一地点または瞬間にも凝固する、つまり、完全なものとなることはなく、つねにあるところの舞踊ではなく、あらぬところの舞踊に向かって自らを投射してゆくそのありかたにある。

(註) 1) マクシーン・シーツ＝ジョンストン：カリフォルニア大学で芸術学士を、ウィスコンシン大学にて芸術修士および哲学博士を取得。

主著“The Phenomenology of dance” Wisconsin Univ. Press, Madison & Milwaukee 1966  
2) S. K. Langer “Feeling and Form” Charles Scribner’s New York 1953

3) ジャン＝ポール・サルトル『存在と無』 第一分冊 松浪信三郎訳 人文書院 1956